

井上達夫『共生の作法…会話としての正義』より。表記等に若干変更を加えた。

都合により省略

都合により省略

都合により省略

都合により省略

都合により省略

第二問 次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

生き物はいずれ死ぬ。どんなに周囲から愛され、その存在意義を認められ、その生が産み出す諸効果に周囲が敬意を払って来て、その恩恵に浴することがあったとしても、そのような恵まれた状態は永遠ではない。有限である。しかも、その有限性は、生命の有限性とイコールではない。その有限性のすきまに「害虫としての生」という生の様態が単食うことになる。カフカの『変身』が描き出した生存のおぞましい姿とは、この有限性のすきまを埋める現実のことである。生き物、いやしくも人間をみだりに殺してはならないはずだが、ひとが殺害^{キラーブル}可能な存在として、しかも猶予つきで暫定的に生かされてしまう時間というものも、私たちの終末期には控えている。死刑宣告を下されていながら死刑執行の時だけが先延ばしにされる、そういった時間を「害虫の時間」として表出すること。二〇世紀文学のなかで『変身』がなした何よりも大きな達成はそこにあった。

生き物の命は、想像以上にたくましい。ころつとか、ぼっくりとかは逝かない代わりに、しぶとく生き延びる生がある。しかし、そのたくましさは、脆^{もろ}さやこわれやすさへと、いつのまにか置き換わってしまう。生れてこのかたグレーゴルの名で呼ばれてきた生き物は、臓器の機能不全というよりは、外傷に由来する衰弱と、昂進^{こうしん}する食欲不振と、生きることの希望のなさによって、後戻りのきかない形で死へと追いこまれていく。そして、その脆さ、傷つきやすさに追い討ちをかけるように、父親の家庭内暴力がグレーゴルの死期を早める方向で作用する。『変身』に先がけて書かれた短篇『判決』^{たんぱん}においては、父の暴言が主人公を「溺死」の刑に処したのだったが、『変身』では、殺害^{キラーブル}可能な存在として「変身」をとげた主人公に対する父の暴力が、こんどこそ致命傷を負わせるのである。

「害虫」に変身したグレーゴルの傷つきやすさは、目をおおいたくなるほどである。グレーゴルはまず起きぬけにみずからの変形した身体に皮膚病の兆候を見るが、その皮膚病が全身に広がる速度にも増して、父親の暴力が彼に負わせた傷は、ただでさえ身動きの不自由だった彼をいよいよ障害だらけの体へと変えていく。息子グレーゴルの体の不調を慮^{おもひばか}って「医師」の権威にすることを咄嗟^{とっさ}に思いついた母に対してさえ、父はそれはなからはねつけてしまう。父は息子の無防備さ、傷つきやすさを利用

して、すきあらば息子を厄介払いにしようと考えている。戸口から自室に戻ろうとしてもたまたする息子を後ろから蹴飛ばして、左半身に深手を負わせるのも父親だし、家族の女たちを守るのが自分の務めだとしても言わんばかりに、リングでグレーゴルを攻撃するのもその父親だ。有害無益な存在を排除することに家父長らしさの発現を見出した父の暴力行使は、いつも一線を踏みこえてしまう。計画的に駆除を施すわけではないが、ことあるごとに衝動的な家庭内暴力で事態を確実に悪化させる。おかげでグレーゴルの傷つきやすいからだはあられもなく壊れてゆく。死に行くものに容赦なく追い討ちをかける虐待。『変身』の物語を悲惨に見せ、しかしリアルに見せているのは、死に行く存在に対して嵩かさにかかって攻めかかるヒステリックなまでの攻撃性の昂進を描き出すその非情さである。そして、グレーゴルの傷つきやすい身体は、おそいかかってくる暴力の痕跡こんせきをとどめるためのサンドバッグとして見る影もなく横たわる。

もつとも、衛生主義的な権力の発現ともいうべき父親の首尾一貫した行動に対して、他の家族がみんな足並みをそろえているわけではない。息子の異状に気づいたとき、ひとまず「医師」の権威にすがろうとした母は、その要求を黙殺され、退けられてからは、ひたすら現実をはぐらかし、息子の姿を正面からは見ないことで、すべてをうやむやにする姿勢をとる。母にとって息子グレーゴルは、一家の大黒柱であった頼りがいのあるグレーゴル以上でも以下でもない。彼女は息子に手の施しようがないとわかった段階で、もはやそれを死んだものとして、はやばやと哀悼の対象に据えてしまったのだ。相手を着実に死へと追いやっていく勢力のかたわらで、すでにその死を先取りする形で哀悼するもうひとつの勢力がある。兵士を戦場に送り出す犠牲者創出のシステムがそうであるように、哀悼のシステムを兼ね備えない犠牲者創出はない。グレーゴルの両親は、皮肉にも調和的な一対をなしている。

さらに、それでも相手が生きていくかぎり、その生命を維持するための最低限の雑事にはだれかが従事しなくてはならない。妹のグレーテが果たす役割は、介護者のそれだ。一家は家事労働の一部を家政婦に依存しており、グレーゴルが絶命して、「ひからび」た死骸となつて横たわつた後始末は、そんな家政婦のひとりが引き受けるのだが、彼が生きていくあいだ、責任感を持ってその身のまわりの世話を一手に引き受けていたのは妹のグレーテだ。「害虫」の生を息子グレーゴルの生とは見なさない両

親と異なり、少なくとも、妹グレーテは途中まで「害虫」をれつきとした兄と見なしつづける。介護（もしくは飼育）を要するペットが如き存在として兄を生かすための努力、それを彼女は日課として引き受けるのだ。

力づくでも「害虫」を独房に監禁しようとする父。もはや息子はそこにはいないと考え、失われた息子の面影にしがみついた。そして、少しでも「害虫」の延命に役立とうとする妹。「害虫」に変貌したグレーゴルにとって、家族とはそういうものだった。前日までは、老いた両親になんとかゆとりある晩年を保証し、嫁に出すまでのあいだ、妹を扶養することでも家族に大きく奉仕してきたはずのグレーゴルが、一夜にして、排除と否認と介護の対象となる。この家族にとって、息子の死は間近にせまってくる。稼ぎ頭として一家のなかに君臨することをやめたグレーゴルはもはや死んだも同然なのだ。グレーゴルの収入をあてにしないということは、グレーゴルがもはやそこにはいないかのようにふるまうことであり、妹の引き受けた介護労働は、グレーゴルがいけないかのように生きる道を早々と歩み始めた一家にとって、最後の過剰労働なのである。それは、目を背けつつも、その気配に手を合わせようとする祈りのようなものである。

余計者の生。それはひと思いに断つことが最終的に容認されてしまう生であり、その生が引き延ばされたらされたで、その生が永遠ではないことがせめてもの救いとなり、かりにそれが短縮されることがあっても、だれもそれを後悔したり、自責の念にかられたりはいない。グレーゴルが「害虫」に変身してから後、一家の日常はグレーゴル抜きにしても生きられるような生活様式をいつときも早く獲得するために立て直され、要するに、あなたが消えてしまえばどんなにせいせいすることだろうかと、家族が全員で本人に向かって断続的に訴えつづける日常である。妹のグレーテも自分の介護労働が、しょせん一時の気休め（＝祈り）であることに内心は気づいているのであり、介護労働にたずさわるかぎり、その無意味さを考えないようにしているだけだ。そして、その妹による介護の質も日に日に低下していく。

（西成彦『ターミナルライフ 終末期の風景』より。表記等に若干変更を加えた。）

問一 「害虫としての生」とはどのような生か、グレーゴルに対する家族全員の反応を踏まえたうえで、著者の考えをまとめなさい(五〇〇字以内)。

問二 近現代史における「害虫としての生」の事例を具体的に挙げたうえで、そのような生命に対してわれわれはどのように振る舞うことができるか、あなた自身の考えを述べなさい(五〇〇字以内)。